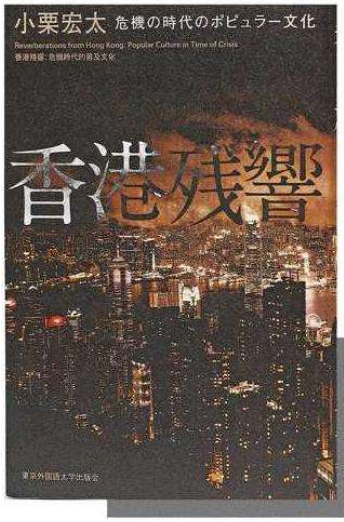
2024年12月14日 中日新聞 夕刊 4頁

ほんの裏ばなし

■著者　小栗宏太さん　が明かす

政治と生活　地続きの問題



香港残響
危機の時代のポピュラー文化
東京外国語大学出版会（3190円）

政治危機で揺れた近年の香港を取り上げてはいますが、この本、実は日本にも通じる郊外をテーマにした「ニュータウン本」でもあるんですよ。書こうと思ったのは、私が愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンで生まれ育ったことと大きく関係しているんです。

香港っていうと、ものすごく都会のイメージがあると思います。でも、都心から離れた「新界」と呼ばれる地域には、大きな郊外が広がっている。人々が普通に暮らす様子を知りたいと思って2014年ごろに初めて訪問したとき、海外の街なのに、すごい懐かしさを感じてしまいました。

なぜかというと、日本と同じような団地や、ショッピングモール、チェーン店が並んでいる。郊外の街は個性がなくてダメだと言われがちですが、「没個性」の中にある面白さに気付かされた。自分が興味を持つ題材って、どこにでもあるようなニュータウン的なものにあるんじゃないか。そんな視点で書いたのがこの本です。

例えば、19年の市民デモで使われた「光復香港〈香港を取り戻せ〉」というスローガン。この言葉はニュータウンの変化がなければ生まれていませんでした。

英国からの返還後、香港の郊外では中国大陸からの買い物客が増え、ショッピングモールの店並みが地元向けではない形に変わっていきました。ありふれた商業施設でも、そこで暮らす人々にとっては特別な場所です。子供の頃に誕生日を祝ってもらったマクドナルドが閉店したら悲しいし、「思い出を返せ」という気持ちになる。郊外各地で起こった「街を取り戻せ」というデモから、このスローガンは生まれました。

一見どこにでもあるようなものでも愛着があるという気持ちは、ニュータウン育ちの私にはよく分かります。本書ではほかにも、流行歌やミルクティーといったポピュラー文化に着目しました。「政治は生活と地続きの問題としてある」ということを描きたかったんです。

反体制的な言動を取り締まる「国家安全維持法」が20年に成立したとき、日本のある新聞の1面には「香港は死んだ」という言葉が載っていました。でもやっぱり、日常生活はそんな簡単に変えられるものではない。ありふれたものこそ、しぶとく残るかもしれない。この本では、そんな「残響」を追いました。香港のことを知りたいという方だけではなく、「郊外」に関心がある方にも読んでもらえたら、うれしいですね。

（聞き手・内田淳一）

香港の市民デモ　香港は1997年に英国から返還された後も、「一国二制度」として中国本土とは異なる自治が認められてきたが、徐々に大陸側の影響が拡大。2014年には民主化を求める学生らによるデモ「雨傘運動」が、19年には中国本土への容疑者引き渡しが可能になる「逃亡犯条例」改正案に反対する大規模なデモが起きた。

おぐり・こうた　1991年、愛知県春日井市生まれ。中部大、米・オハイオ大を経て東京外国語大で博士号取得。現在は同大アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー。共編著に「香港と『中国化』―受容・摩擦・抵抗の構造」（明石書店）。香港映画の字幕翻訳なども手がける。

（ｃ）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています